

チョコレート嚢胞罹患側卵巣の ART 培養パラメーターへの影響

井谷 裕紀^{1,2}, 辻 勲¹, 重田 護¹, 樽井 千香子¹, 水野 里志¹, 福田 愛作¹,
森本 義晴³

¹IVF 大阪クリニック

²広島大学大学院統合生命科学研究科

³HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

卵巣チョコレート嚢胞合併不妊患者の生殖補助医療（ART）では採卵数低下の報告があるが、その他の影響についてコンセンサスはない。既報の多くは既往の有無で ART 成績を比較しているが、このような比較では嚢胞側卵巣の影響を詳細に解析することは困難と考える。そこで本研究では、片側卵巣嚢胞合併不妊患者において嚢胞の有無別に個々の卵巣について ART 培養成績を比較した。

【方法】

2020 年 4 月から 2022 年 5 月迄の期間で ART を実施した、片側チョコレート嚢胞合併不妊患者 53 名 58 周期を対象とした。正常卵巣（正常群）と嚢胞卵巣（嚢胞群）を区別し採卵、培養を行った。検討 1：両群間で採卵数、成熟卵数、成熟率、受精率、分割率、胚盤胞数、胚盤胞到達率、良好胚盤胞率（Gardner 3BB 以上）を比較した。検討 2：嚢胞群を最大嚢胞径が 30mm 以上と未満に分け上記パラメーターを正常群と比較した。

【結果】

検討 1：正常群と比較し、嚢胞群の採卵数(7.5±5.9 個 vs. 5.3±4.2 個, $p<0.05$)は有意に少なく、受精率(77.1±25.6% vs. 88.8±18.5%, $p<0.01$)は有意に高かった。尚、平均嚢胞径は 28.2mm だった。検討 2：嚢胞径が 30mm 以上の場合、採卵数(10.7±7.0 個 vs. 5.2±4.6 個, $p<0.01$)と成熟卵数(10.5±9.3 個 vs. 5.3±5.6 個, $p<0.01$)は正常群と比較し嚢胞群で有意に少なかった。30mm 未満の場合、正常群と比較し嚢胞群で受精率(72.2±27.4% vs. 84.9±22.6%, $p<0.05$)が有意に高かった。両検討で上記以外の項目に有意差はなかった。

【考察】

嚢胞症例は採卵数が低下することが報告されているが、本研究によりこの低下は嚢胞側卵巣のみで起きていること、またサイズが大きくなる程影響が大きいことも明らかとなった。逆に嚢胞群では正常群より受精率が高くなったが、その後の培養成績に差はなかった。本検討より嚢胞側卵巣ではより生存力の強い卵胞が生き残り、全体としての生殖能力の存続維持補完機構が働いている事を推測させた。